



Title	高知県四万十市西土佐奥屋内方言の屈折接尾辞 トー
Author(s)	平塚, 雄亮
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2015, 13, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51437
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高知県四万十市西土佐奥屋内方言の屈折接尾辞トー

平塚 雄亮

【キーワード】奥屋内方言、屈折接尾辞、過去、トー

【要旨】

本稿では、主に筆者による話者への面接調査をもとに、高知県四万十市西土佐奥屋内方言で用いられている屈折接尾辞トーの記述を行った。その結果明らかになったことは、以下の2点にまとめられる。

- (a) 形態統語的特徴：トーは従属節や連体節には出現せず、主節末のみに現れうる屈折接尾辞である。この環境においては-(r)u や-ta と範列的な関係にある。また、動詞・形容詞・形容動詞・コピュラのいずれの語幹にも、特に語彙的な意味に左右されず接続しうる。なお、トーにはネ・エ・ヤという文末詞が後接しうる。
- (b) 意味的特徴：トーがもつ意味機能には大きく2つあり、それは「話し手が関与した過去の事態を、情報価値の高いものとして聞き手に伝える」ことと、「過去の事態を把握し、驚きの気持ちを表す」ことである。

1. はじめに

高知県四万十市西土佐奥屋内方言（以下「奥屋内方言」）には、トー（-too¹⁾）という屈折接尾辞が存在し、(1)、(2)のように用いられる（ガは当該方言の準体助詞）。以下、方言の例文の下に標準語訳を示す。

- (1) 道路の真ん中に大きな石が落ちちゃったトー。そんで遅なったがよ。
‘道路の真ん中に大きな石が落ちていた。それで遅くなったんだよ。’
- (2) （「この前孫が生まれた。」と聞いて）それはよかったねー。
‘それはよかったね。’

(1) には自分自身が関与した過去の事態を報告するという機能があり、(2) では驚きの気持ちが表されているようである。本稿は、このトーについての記述を行うことを目的とする²⁾。当該方言では(2)のように文末詞が後接するときにト/-to/という短呼形で現れるが、何も後接しないトー//too//を基底形とし、以下これを代表形として記述を進めていく³⁾。

管見の限りトーにかんする先行研究はないが、『全国方言資料』の高知県幡多郡大月町竜ヶ迫のテキストにおいて使用例が数例みられる（標準語訳も原文ママ）。

-
- 1) 本稿で用いる'-'は接辞境界を表す。
 - 2) 本稿で用いるデータは、2011、2012年度の大阪大学「社会言語学演習」で行ったフィールドワークにもとづく。詳細は野間（2013）を参照のこと。なお、調査票作成の段階から、高木千恵氏に多くご教示いただいた。
 - 3) 文末詞が後接せずとも短呼されることはあるが、長呼の場合との意味的なちがいはなさそうである。

- (3) オトオンチャンガ アノ センシシタ トキノ アノ アノ トキノ オドリラ
ト ユーモナ ハ メザマシカットナー
‘音おじさんが戦死したときのあのときの踊りなどというものは、めざましかった
ねー’

このようなトーが現在でも生産的に用いられているのは西土佐よりも南の地域のようにある⁴⁾。奥屋内の北に隣接する大宮でも調査を行ったが、使用者はみられなかった。ただし、本稿ではトーの地理的な分布や他方言における使用については深く踏み込まないことにする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節で調査概要を述べる。3 節では形態統語論的特徴の、4 節では意味的特徴の記述を行う。5 節は本稿のまとめと今後の課題である。

2. 調査概要

本稿は、2011 年 7 月、2012 年 7 月に奥屋内生え抜きの男性（1935 年生まれ（調査時 76、77 歳））に対して、筆者が行った面接調査の結果にもとづいている。この話者以外の複数名の奥屋内方言話者に対しても面接調査を行ったが、トーが生産的に使用できる話者はいなかった。ただし、2012 年 7 月に収集した奥屋内生え抜きの女性（1911 年生まれ（調査時 101 歳））⁵⁾ のテキストでは、その使用が確認できた（使用例は 3.2 節で示す）。2012 年 7 月の調査時において、奥屋内には 50 人ほどしか生活していない⁶⁾ ことから、この男性が当該方言における最後の使用者世代である可能性があり、早急に記述を行う必要がある⁷⁾。

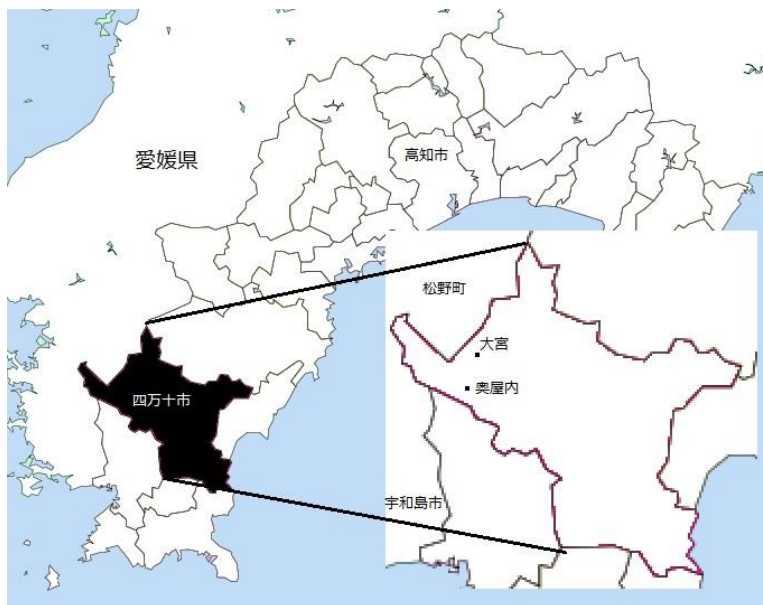


図 1 奥屋内の位置

- 4) 高木千恵氏による。
5) 高齢のため、面接調査を行うことはできなかった。
6) 話者によると、そのうち最年少は 53 歳（2012 年調査時）とのことである。
7) 話者自身も「死語に近い」と語っていた。

3. 形態統語的特徴

ここではトーの形態統語的特徴について説明する。3.1 節で屈折接尾辞であることの認定について、3.2 節でトーに後接する形式についてまとめる。

3.1. 屈折接尾辞の通言語的特徴

トーの出自は明らかではないが、少なくとも共時的には屈折接尾辞であるといえる⁸⁾。Zwicky and Pullum (1983)、風間 (1992)、Bickel and Nichols (2007) にしたがえば、屈折接辞が通言語的にもつ特徴は以下のようなものである。

(4) Morphological regularity : その接辞がつく要素 (たとえば動詞語幹) の意味によらず生産的・規則的につく

(5) Semantic regularity : 常に合成的・透明な意味をもつ

(6) Syntactic restrictiveness : 出現が統語論環境に影響されている

以下、それぞれについて分けて考えてみる。

3.1.1. Morphological regularity

まず、(4) について考えることにする。たとえば日本語の受身を表す派生接尾辞 -(r)are- は他動詞語幹にはつきやすく自動詞語幹にはつきにくいという性格があるが、トーの出現はこのようなことには制限されない。

(7) 家族みんな「うまい」言うて食いよっトー。 (他動詞)

‘家族みんな「うまい」って言って食っていた。’

(8) 玄関に誰か知らん人が立っちょっトー。 (自動詞)

‘玄関に誰か知らない人が立っていた。’

同様に、動詞語幹の意味が意志的／非意志的であるとかいったことにも制限されず、トーは生産的に動詞語幹に接続することができる。

3.1.2. Semantic regularity

また (5) についても、たとえば日本語の -(r)are- や -te(i)- のような複数の意味をもつ派生接尾辞とちがい、基本的には (1) の例文で示したような「過去の事態を報告する」という意味をもつ。品詞のちがいに注目しても、トーは形容詞、いわゆる形容動詞⁹⁾、コピュラ (ジャ) のいずれの語幹にも接尾する。

(9) 一日中畑仕事しよっトー。 (動詞)

‘一日中畑仕事をしていた。’

(10) 昔はぬくい日でもお宮さんのあたりはずずしかっトー。 (形容詞)

8) 後述するように、トーはテンスとして過去を表すため、通時的にはタに文末詞か何かの形式が後接し、融合した可能性がある。ただし、それを裏づける現象は確認されていない。この点は、今後検討すべき課題である。

9) カーター・白坂 (2014) にあるように、奥屋内方言を含む西土佐方言では、形容動詞を述語化する形式として、ジャやヤといったコピュラのほかに、ナという形式も用いられている。

‘昔は暑い日でもお宮さんのあたりはずずしかった。’

- (11) 昔は四万十川はまっときれいなかったー。 (形容動詞)

‘昔は四万十川はもっときれいだった。’

- (12) (二十歳の頃のようにすについて聞かれて) あの頃はおらはまだひとりもんじゃっ
トー。 (コピュラ)

‘あの頃は私はまだひとりものだった。’

3.1.3. Syntactic restrictiveness

最後に (6) については、トーの出現は主節末という統語的環境に限定されており、従属節や連体節に現れることはない(*は非文法的であることを示す)。従属節(例文(13)、(13'))や連体節(例文(14))ではタ(-ta)が用いられる。

- (13) A: あのおみやげ、家族も食えたかね?

B: 家族みんな「うまい」言うて食いよっ{*トー/タ} けんど、おらは食わざった。 (従属節)

‘A: あのおみやげ、家族もおいしく食えた?’

‘B: 家族みんな「うまい」って言って食っていたけど、私は食わなかった。’

- (13') B: 家族みんな「うまい」言うて食いよっ{*トー/タ} けん、おらも食うた。 (従属節)

‘B: 家族みんな「うまい」って言って食っていたから、私も食った。’

- (14) 今日、昔校長先生しよっ{*トー/タ} ○○さんにおーた。 (連体節)

‘今日、昔校長先生をしていた○○さんに会った。’

以上のことから、トーの出現は主節末という統語的環境に限定されていることがわかる。このほか、トーは、いわゆるノダ文をつくる形式ガ(ジャ)を後接させることはない¹⁰⁾。

- (15) (西土佐について聞かれて) *ここは昔から伊予とつながりがあつたガジャ。

‘ここは昔から伊予とつながりがあつたんだ。’

3.1.4. 奥屋内方言の屈折接尾辞

以上 3.1.1、3.1.2、3.1.3 節で確認したように、トーは屈折接尾辞であると考えることができる。奥屋内方言ではテンスにかかわる屈折接尾辞として、標準語と同様に-(r)u(非過去)や-ta(過去)を用いるが、トーはこれらの屈折接尾辞とは範列的(paradigmatic)な関係になっている。つまり、当該方言では主節末において述語になる語を閉じるとき、テンスにかかわるものとして-(r)u か-ta か-too の3つのうちいずれかを選択することになる。以上のことから、奥屋内方言のテンスにかかわる屈折接尾辞は表1のようにまとめられる(テンスにかかわらないものに命令を表す-e~jo などがあるが、ここでは議論にかかわるものだけを示す)。

10) ただし、「ここは昔から伊予とつながりがあつたがじゃっトー。」のように、ノダ文の後部にトーが生起することはできる。

表 1 奥屋内方言の屈折接尾辞

		非過去	過去
主節末	中立	-(r)u	-ta
	報告	-	-too
主節末以外	中立	-(r)u	-ta

※主節末・非過去・報告の形式は存在しない。

3.2. 後接する形式

4 節で詳しくのべるが、トーの表す意味には過去の事態の報告と驚きがあり、それぞれ後接する形式がちがっている。(2) のように驚きを表す場合には、文末詞ネやエが後接できるようである。ただし、エはこの男性話者自身は使用せず、女性が使用する印象があるという。

(16) (「この前孫が生まれた。」と聞いて) それはよかつト {ネー／エ}。

‘それはよかったね。’

ネやエの意味については記述がおよんでいないが、筆者の観察する限り、標準語の「ね」とさほど変わらないという印象であった。ただし、この話者が多用する文末詞ネヤ¹¹⁾ はトーと共起不可能である。

(17) *それはよかつトネヤ。

‘それはよかったね’

(1) のように報告を表す場合に後接できる文末詞については、この話者からは確認できなかった。ただし、この話者と 1911 年生まれの女性の談話では、文末詞ヤ¹²⁾ の後接が確認できた。(18) ～ (20) はこの女性の使用した実例である。

(18) 人よりか、人よりか、ええものを着ーちよつトヤー。

‘人より、人より、いいものを着ていたね。’

(19) 銀貨ばかりをね、入れちよつトヤー。

‘銀貨ばかりをね、入れていたね。’

(20) なかなか家庭が骨折れトヤー。

‘なかなか家庭が骨折れたね。’

ただし、男性話者はトーにこの文末詞を後接させて用いることはないようである。

4. 意味的特徴

3.1.4 節でも触れたとおり、トーはテンスとしては過去を表し、主節末においてタと範列的な関係をもっている。ここではその意味的特徴について、報告を表すものと、驚きを表すトーの 2 つに分け、それぞれ 4.1 節、4.2 節でまとめる。

4.1. 報告

報告を表すトーは、以下のように用いられる。

11) この文末詞の意味等については記述がおよんでいない。

12) 既出の文末詞同様、意味等については記述がおよんでいない。

(21) A：あの人何しよった？

B：もう家に帰ったけど、さっきまで畑で仕事しよっトー。

‘A：あの人何していた？’

‘B：もう家に帰ったけど、さっきまで畑で仕事していた。’

(22) (最近ようすがおかしい人をみて) あの男はあんげなことはせざっトー。

‘あの男はあんなことはしなかった。’

(23) A：昔は電話は何色じゃった？

B：どこの家も黒 {じゃっトー／かつトー}。

‘A：昔は電話は何色だった？’

‘B：どこの家も黒 {だった／かった}。’

トーを用いると、その事態がわざわざ報告するに値することであり、話し手、あるいは聞き手にとって重要であるということが表される¹³⁾。このとき、聞き手はその事態について知らない(と話し手が思っている)。そのため、(25)のように話し手自身に特に関与せず、単に事実を描写して伝えるようなときにはタしか用いることができない(#は語用論的に不適切であることを表す)。

(24) 道路の真ん中に大けな石が落っちょっトー。そんで遅なつたがよ。

(例文(1)を再掲)

‘道路の真ん中に大きな石が落ちていた。それで遅くなったんだよ。’

(25) 川の中に大けな石が落っちょっ {#トー／タ}。

‘川の中に大きな石が落ちていた。’

その事態が反復的なものであっても用いることができる。

(26) (亡くなった〇〇について思い出して) 〇〇はたばこをなかなか吸いよっトー。

‘〇〇はたばこをよく吸っていた。’

トーは、(27)や(28)のように自分が生まれる前の出来事であったり、(29)や(30)のように話し手が確信をもっていない事態には用いることができない。

(27) A：龍馬はどこで死んだがか？

B：#京都で死んどー。

‘A：龍馬はどこで死んだの？’

‘B：京都で死んだ。’

(28) (昔の津大村のようすについて聞かれて) #おらが生まれる前はまっと人が多かつトー。

‘私が生まれる前はもっと人が多かった。’

(29) (昨晚何があったのか尋ねられて) #ゆんべ誰ぞ大けな声で歌いよっトー。

‘ゆうべ誰かが大きな声で歌っていた。’

(30) (昨晚いいにおいがしたが、何だったのか尋ねられて) #ゆんべどこぞの家でさんまを焼きよっトー。

13) 話者自身からも、トーについて「人に伝えたいときに使用する」という内省が得られた。

‘ゆうべどこかの家でさんまを焼いていた。’

トーは報告という意味ももっているため、たとえば聞き手のほうに情報を要求する疑問文などでは使用することができない（例文（31））。また、聞き手の存在しない独話でも用いることができない（例文（32））。

(31) *あの男はさっきまで何をしよっトー？

‘あの男はさっきまで何をしていた？’

(32) （朝起きて、独り言で）#ゆんべは腰が痛かっトー。

‘ゆうべは腰が痛かった。’

また、言及される事態時と発話時との間に隔絶がない、つまり、その事態が現在も続いている場合にも、トーを使用することができる。

(33) （外で）

A：家ん中もたいちゃ暑いろ？

B：ここよりはまっとすずしかっトー。

‘A：家の中もすごく暑いでしょう？’

‘B：ここよりはもっとすずしかった。’

(34) （山のようすについて聞かれて）{昔は／昔からずっと} きれいなかっトー。

‘{昔は／昔からずっと} きれいだった。’

ある出来事が実現した瞬間を知覚した直後でも、聞き手に報告しさえすれば使用することができる。

(35) （赤ちゃんが笑ったのをみて、第三者に対して）おい、ようよわろうトー。

‘おい、やっと笑った。’

なお、基本的には話し手が直接確認してきた事態について報告するが、自分自身が体験してきたことを伝える場合、つまり、主語が一人称の場合にも問題なく使用できるとのことであった。Aikhenvald（2004）などによれば、エビデンシャリティにかかわる形式を一人称に使用するの、客観的に自分自身を描写するという特殊なケースに限られるという。しかしながらトーにはそのような効果はなく、自然に話し手自身の行動を報告することができる（3.2 節で示したテキストの実例（18）もそうである）。よって、トーは目撃性というエビデンシャリティを表す形式であるとは言いがたく、直接確認は傾向に過ぎないようである。

(36) A：今日は何しよった？

B：一日中畑仕事しよっトー。

‘A：今日は何をしていた？’

‘B：一日中畑仕事していた。’

(37) （二十歳の頃のようすについて聞かれて）あの頃はおらはまだひとりもんじゃっトー。
（例文（12）を再掲）

‘あの頃は私はまだひとりものだった。’

4.2. 驚き

1 節でも触れたように、トーのもう 1 つの用法に驚きを表すものがある。これは、聞き手の過去の言動に対して、話し手がその場で驚きの気持ちを表すものである。

(38) (テストで 100 点を取ってきた孫に対して) えらかつトー。

‘えらかった。’

(38) のように形容詞だけではなく、驚きを表すものであれば動詞 (例文 (39)) や名詞 (例文 (40)) も述語として用いることができる。

(39) (電車を乗り継いで一人でやってきた孫に対して) 一人でよう {これ／き} トー。

‘一人でよく {こられ／き} た。’

(40) 孫：頑張ったけど 3 位じゃった。

祖父：上等じゃつトー。

‘孫：頑張ったけど 3 位だった。’

‘祖父：よくやった。’

微妙なちがいはあるが、驚きの気持ちを表さず、評価的な気持ちを表す場合にはトーは使用できないとのことであった。

(41) (野球の試合で負けて帰ってきた孫に対して) 残念じゃつ {#トー／タネ (ヤ)}。

‘残念だった。’

(42) (野球の試合で負けて帰ってきた孫に対して) いけざつ {#トー／タネ (ヤ)}。

‘だめだった。’

以上の例文も含み、トーが用いられる環境ではすべてタも用いることができるが、タは驚きという気持ちには積極的には関与しない、中立的な形式である。

5. まとめと今後の課題

本稿では、奥屋内方言の屈折接尾辞トーについて、以下のように記述を行った。

(a) 屈折接尾辞トーは、述語になる語の意味にかかわらず用いられる。従属節には現れず、主節末において-(r)u、-ta と対立する。

(b) 意味的には「過去の事態の報告」や「驚き」を表す。前者は一人称の場合も含め、話し手自身が体験したこと、また、確認したことを聞き手にわざわざ伝えようとする態度を表すものである。後者は、過去の事態に対して驚きを表すものである。

(b) については、トーのもつ 2 つの意味がどのように結びついているのか、その派生関係などを明らかにすることができなかった。これについては今後の課題としたい。

なお、本稿では奥屋内方言のトーに限って記述を行ったが、和歌山県の一部など、他地域においても同様の形式が屈折接尾辞として存在しているようである。今後他地域におけるトーについての調査を行うことで、当該方言のトーの出自など、さらなる詳細が明らかになるかもしれない。

【参考文献】

- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」 宮岡伯人編『北の言語——類型と歴史』 pp.241-260, 三省堂.
- カーター, バーバラ・白坂千里 (2014) 「高知県西土佐大宮方言におけるジャ・ヤとその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』12, pp.1-13, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 日本放送協会編 (1981)『全国方言資料 第八巻 辺地・離島編Ⅱ』(1999年 CD-ROM で再版)
- 野間純平 (2013) 「フィールドワークの概要」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp.1-4, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. OUP.
- Bickel, Balthasar and Nichols, Johanna (2007) Inflectional morphology. In Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description (2nd edition)*, pp.169-240, CUP.
- Ziwicki, Arnold M. and Pullum, Geoffrey K. (1983) Cliticization vs. Inflection: English *n't*. *Language* 59-3, pp502-513.

ひらつか ゆうすけ (大阪大学大学院修了生)

yusukehiratsuka@hotmail.com